

[A年] 公現後第1主日(2021年1月10日)

【旧約聖書日課】サムエル記上16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かせなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」2サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、3いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」4サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」5「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食と一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。7しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さを目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」8エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」9エッサイは次に、ジャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」11サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」12エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」13サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

サムエル記上16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことで悲しんでいるのか。私はイスラエルの王位から彼を退けた。角に油を満たし、出かせなさい。あなたをベツレヘム人エッサイのもとに遣わす。私は彼の息子の中に、王となる者を見つけた。」2サムエルは言った。「どうして、私が行けましょう。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえを献げるために来た』と言いなさい。3いけにえを献げるときには、エッサイを招きなさい。あなたがなすべきことは、その時に私が教える。あなたは、私がそれと告げる者に油を注ぎなさい。」4サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老たちは不安そうに出迎えて言った。「お出でになったのは、平和なことのためですか。」5サムエルは言った。「平和なことです。主にいけにえを献げるために来ました。身を清めて、私と一緒にいけにえの儀式に出てください。」こうして、サムエルはエッサイとその息子たちを清め、いけにえを献げるために彼らを招いた。

6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だと思った。7しかし、主はサムエルに言った。「容姿や背丈に捕らわれてはならない。私は彼を退ける。私は人が見るようには見ないからだ。人は目に映ることを見るが、私は心を見る。」8エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者も主はお選びにならない。」9エッサイは次にジャンマを通らせたが、サムエルは言った。「この者も主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子をサムエルの前に通してみたが、サムエルはエッサイに言った。「主はこれらのうち、誰をもお選びにならない。」11サムエルはエッサイに言った。「あなたの息子はこれだけですか。」エッサイは言った。「末の子がまだ残っていますが、羊の群れの番をしています。」サムエルは、エッサイに言った。「人をやって、彼を連れて来ててください。彼が来るまでは、私たちは食卓には着きません。」12エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。彼がその人である。」13サムエルは油の入った角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

(新共同訳)

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙6章12～23節

12従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。13また、あなたがたの五体を不義のための道具として罪に任せてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生き返った者として神に献げ、また、五体を義のための道具として神に献げなさい。14なぜなら、罪は、もはや、あなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるのです。

15では、どうなのか。わたしたちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯してよいということでしょうか。決してそうではない。16知らないのですか。あなたがたは、だれかに奴隷として従えば、その従っている人の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。17しかし、神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、今は伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり、18罪から解放され、義に仕えるようになりました。19あなたがたの肉の弱さを考慮して、分かりやすく説明しているのです。かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい。20あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。21では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。22あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。23罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ローマの信徒への手紙6章12～23節

12ですから、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。13また、あなたがたの五体を不義のための道具〔直訳→武器〕として罪に献げてはなりません。かえって、自分自身を死者の中から生かされた者として神に献げ、自分の五体を義のための道具として神に献げなさい。14罪があなたがたを支配することはありません。あなたがたは律法の下ではなく、恵みの下にいるからです。

15では、どうなのか。私たちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯そう、ということになるのでしょうか。決してそうではない。16知らないのですか。あなたがたは、誰かに奴隷として従えば、その人の奴隷となる。つまり、罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従う奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。17しかし、神に感謝すべきことに、あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準〔直訳→型〕に心から聞き従って、18罪から自由にされ、義の奴隷となったのです。

19あなたがたの肉の弱さを考慮して、私は分かりやすい物言いをしています。かつて、五体を汚れと不法の奴隷として献げて不法に陥ったように、今は、五体を義の奴隷として献げて聖なる者となりなさい。20あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身〔別訳→縁のない者〕でした。21では、その時、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥とするものです。その行き着くところは死です。22しかし、今や罪から自由にされて神の奴隷となり、聖なる者となるための実を結んでいます。その行き着くところは永遠の命です。23罪の支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠の命なのです。

(新共同訳)

【福音書日課】 マタイによる福音書3章13～17節

13そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。14ところが、ヨハネは、それを思いとどませようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」15しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。16イエスは洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。17そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書3章13～17節

13その時、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。14ところが、ヨハネは、それを思いとどませようとして言った。「私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところに来られたのですか。」15しかし、イエスはお答えになった。「今は、そうさせてもらいたい。すべてを正しく行う〔真訳→すべての義を満たす〕のは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。16イエスは洗礼を受けると、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の霊が鳩のようにご自分の上に降って来るのを御覧になった。17そして、「これは私の愛する子、私の心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・1月10日「公現後第1主日(降誕節第3主日)」の日課主題は「イエスの洗礼」。東方正教会では1月6日「公現日(エピファニー)」に「主の洗礼」を記念するが、西方教会では「公現後」の主日を「主の洗礼の主日」として記念してきた。東方正教会の習慣と整合させて、「主の洗礼の主日」までを「降誕節」(典礼色=白)の内とみなす習慣もある。一方で、西方教会には、「降誕節」を「降誕日」から40日後に記念する「聖燭祭(キャンドルマス)」=「主の奉獻の祝日」までとする考えもある。

・「主イエスの洗礼」の出来事は、全福音書共通に、主イエスが宣教活動を始めるに際して洗礼者ヨハネから受洗されたこととして描かれている。主イエスの公生涯の最初に位置づけられているこの出来事は、①洗礼者ヨハネと主イエスとの関係性、②洗礼に伴う聖霊降臨と「神の子」宣言、③キリスト者の洗礼の起源としての主イエスの洗礼(ヨハネの洗礼との連続性と非連続性)、などいくつもの主題が組み込まれている。

旧約日課(サムエル上16章より)

・「サムエル記(上下)」は、ユダヤ教正典中「前の預言者」の中に位置づけられる文書。「列王記(上下)」と共にイスラエルの王国記として構成された文書であるが、王宮で王国の正統性を主張するために編纂されたものではなく、王国滅亡後の時代に、ユダヤ人社会(国家)を「宗教共同体」として再建することを目指した集団(その中枢に「預言者」の伝統を継承するグループが存在したと考えられる)によって、「あるべきイスラエル共同体(国家)」を示す意図で構想された「イスラエル正史」の一部として編纂されたと考えられる。「イスラエル正史」は、「カナン定住」以前の時代を取り扱う「律法」、すなわち「創世記」から「出エジプト記」までの五書と、「カナン定住」から「王国滅亡(カナンからの追放)」までの時代を扱う「前の預言者」、すなわち「ヨシュア記」から「列王記」までの各書とに大きく分けられ、相対的には前者の時代を理想としていると言えるが、一貫してイスラエルの神に対する不従順が露わにされる描写で彩られている。特に「王国時代」を物語る「サムエル記」および「列王記」は、神に対する不従順が際立って強調して描かれていくが、その中にもあっても、例外的に神に従順であったと評価される人物が登場する。その代表例が「サムエル記」の主役とも言える「ダビデ」で、「列王記」中の王たちの中での評価は「ダビデ」を基準にして描かれる。「サムエル記」に描かれる「ダビデ」は、実像以上に理想化(英雄化)されている側面があると考えられる必要があるが、「イスラエル」と「ユダ」を統合し両者から初代サウル王以上の支持を得た理想の王として描写することで、「列王記」編者の考える「再建されるべきユダヤ宗教共同体」の指導者像を示そうとしているのであろう。

・日課箇所は、ダビデが預言者サムエルを通して見いだされ、「油注ぎ」によって神の選ばれた器であることが示される場面である。「油注ぎ」自体は、初代王となったサウルに対しても行われており(サム上 9 章)、決定的な意義を有しているわけではない。むしろ、「油注がれた者」がその意義をどれほど自覚し、尊重して自らの(神から与えられた)使命に忠実であり続けることができるか、ということが問われるのである。それゆえに、ダビデは、自分の命を狙い始めたサウル王に対しても、「油注がれた者」として徹底的に尊重する態度を示す者として描かれるのである(サム上 24:7、同 26:9 など)。

使徒書日課(ローマ 6 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪のローマ教会の人びとに宛てて、自分の訪問計画を示し、その後のスペイン伝道計画への協力を求めるために記された。そこで、神学的議論として取り上げられる内容も、基本的には異邦人伝道の意義や根拠を示すことを目的としたものとなっている。

・日課箇所は、前段(1~11 節)で「洗礼」についての基本的な理解を示したのを受けて、「洗礼」によってキリストの「死と復活の命」にあずかることになった者のあり方を描き示している。その要点は、「洗礼」を受けてキリストに結ばれた「新しい命」を生きるようになった者は、かつての「罪(ハマルティア)の奴隷」としての生き方から解放され、「義(ディカイオシュネー)の奴隷」すなわち「神の奴隷」としての生き方に変えられている、という自己理解である。

・ここでのパウロの論じ方は、19 節で断りがあるように、一般化された神学的論述ではなく、あくまでローマ教会の読者を想定して敷衍したものである。パウロが「分かりやすく説明」と言っているのは、おそらく「奴隷(ドゥーロス)」の比喩を用いたことであろう。本書簡でパウロは、「ドゥーロス」をこの箇所の他では 1 回用いているのみである(1:1「僕」)。この箇所でパウロが元来、強調したいことは、おそらく 17 節「今は伝えられた教えの規範(テュポス=型/模範)を受け入れ」で、他の書簡で「わたしたちを模範(テュポス)として歩んでいる」(フィリ 3:17)、「すべての信者の模範(テュポス)となる」(I テサ 1:7)、「信じる人々の模範(テュポス)となり」(I テモ 4:12)、「良い行いの模範(テュポス)となりなさい」(テト 2:7)などと語っているのと同じ発想で記しかけたにもかかわらず、敢えて何らかの意図があって「奴隷」のたとえに戻ったのであろう。

・パウロの用法では、「奴隷/僕(デューロス)」はキリストとの関係性を表す場合にもっぱら用いている。その意味で、たとえ対比としてであっても「罪の奴隷」という表現は、必ずしもパウロの本意ではないのだろう。パウロにとって、本来的に「罪」は無力なものであり、人が支配されて隷従を強いられるようなものではないからである。

福音書日課(マタイ 3 章より)

・日課箇所は、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝える「主イエスの洗礼」の場面。マタイ福音書は、マルコ福音書、ルカ福音書と比較して詳しくこの場面を描き、ことに洗礼者ヨハネと主イエスとのやり取りを組み入れている。この両者の関係性は、四福音書が共通して、洗礼者ヨハネが主イエスと自分の関係を語るという形式で伝えているが、マタイ福音書だけは同じ問題を「主イエスの洗礼」の場面の中での対話としても伝えているのである。

・14~15 節でしばしば問題とされるのは、主イエスが「正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」と述べられていることの意味である。「正しいこと」は「ディカイオシュネー」で、パウロ書簡で多用され、ほとんどの場合「義」と訳される。マタイ福音書では、降誕物語に登場するヨセフについても「正しい人(ディカイオス)」と紹介しており、また、山上の説教では冒頭「八福の教え」でも二度(5:6、5:10)、さらに「律法論」において(5:17~20)。「義」が問われている。「正しさ/義」の問題はマタイの神学的主題の一つなのである。

・ここで「行う」と訳されている語は「プレローオー」で、降誕物語で繰り返されている「預言者を通して言われていたことが実現する(プレローオー)ためである」の中で用いられる用語である。すなわち、マタイ神学で基礎づけられる「預言者(旧約聖書)を通して言われていた《義》が実現する」ことの中に、洗礼の出来事を位置づけようとしているのである。

来週の誕生日 (1 月 10 日~16 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-2 番「聖なるみ神」(= I 18)は、17 世紀ドイツ最大の讃美歌作曲家 J. クリュウガーが作曲した曲に合わせて、20 世紀日本の礼拝学・讃美歌界をリードした由木康が自ら編纂に携わった 1931 年版『讃美歌』のために新たに作詞した讃美歌。

・こどもさんびか-106 番「どんどこどんどこ」は、日本聖公会が青年・児童用歌集として編纂した『キミとぼくの 77 曲』(1971 年)のために、立教学院諸聖徒礼拝堂聖歌隊長であった高橋潮(猿田長春)が創作。教団出版局編『こどもさんびか 2』(1983 年)に採用され、『こどもさんびか改訂版』(2002 年)にも引き続き収められた。2012 年のアンケートでは、こどもが好んで歌うさんびか人気ベスト 10 の一つ。

・21-549 番「わたしたちを造られた神よ」は、金城教会信徒の棚橋峯子の作で、公募により採用。『讃美歌 21』ではこの歌詞に二つの曲を付しているが、549 番は、阿佐ヶ谷東教会信徒・岸一隆がキリスト教音楽講習会讃美歌創作クラスで作曲したもの。